

保育実践：りくとはなの思いに寄り添って（3）

—幼稚園，5歳児クラスにおける保育実践—

鈴木 政勝・小野 美枝*
(幼児教育) (三豊市立二ノ宮幼稚園)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部
*767-0021 三豊市高瀬佐股甲1508-1 三豊市立二ノ宮幼稚園

Educational Practice in Kindergarten: Nestle Close to the Mind of Riku and Hana (3)

—Educational Practice in a Kindergarten 5Years Class—

Masakatsu Suzuki and Mie Ono*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Ninomiya Kidergarten, 1508-1 Ko, Samata, Takase-cho, Mitoyo 767-0021*

要旨 小野は、小野による幼稚園5歳児クラス，りくとはなを中心とした保育実践に関して，鈴木と共同研究を行った。小野は鈴木との話し合いを通して自らの子ども理解や働きかけをさらに捉え直し，次の保育実践につなげていった。小野は2人に「大切な存在として受け入れる」「共にする」「認める」というかわりをする。2人は，少しずつではあるが，大きく変容していった。

キーワード 幼児教育 保育者 寄り添う 肯定的認識 やさしさ

I. はじめに

本稿は，幼稚園教諭である小野と幼児教育(保育)研究者である鈴木との共同研究を報告しようとするものである。

共同研究者の一人，小野(以下，小野保育者と呼ぶ)は，幼稚園，5歳児クラス(27名)の担任となった。子どもたちは4歳児クラスから進級してきた子どもたちである。だが，そこに2人の子どもが新たに加わった。その2人の子ども，りく(仮名)とはな(仮名)は，例えば，小野保育者が声をかけると「うるさい」と横を向き，手を差し出すと「ほっとけ」と払いのけ

るといった子どもである。また，小野保育者が「(保育室に集まる時間になったので)お部屋に入ろうよ」と声をかけると「うるさいんじゃ」と言い，逆に，「滑り台に登りその上で座ったり寝そべったりする」子どもである。

小野保育者は，りくとはなが，なぜこうした行動をするのか，その時その内面でどのようなことを感じ考えているのか，よく分からない。また，2人にかける言葉を失ってしまい，どのように働きかけていったらよいか分からない。

小野保育者は，この事態を打開するため，その日のりくとはなの行動を思いだし，詳しく書いてみることにした。また詳しく書きながら，

同時に、2人がなぜこういう行動をするのか、その時内面でどのようなことを感じ思っているのか、理解しようとした。そして、その理解したことも詳しく書いてみることにした。

このことを積み重ねることにより——少しずつではあるが——2人が内面で感じていること、思っていることに、気づき、理解できるようになってきた。

また、小野保育者は、その日のりくとはなにに対する自分の働きかけを思い出し、詳しく書いてみることにした。詳しく書きながら、2人にどのように働きかけたらよいと考えたのか、どのように働きかけたのか、そして2人は自分の働きかけをどのように受けとめ（あるいは受けとめず）、どのように変容していったのか、捉えようとした。そして、捉えた点についても、詳しく書いてみることにした。

このことを積み重ねることにより、どのように働きかけていったらよいか、少しずつ考えられるようになってきた。が、同時に「今日の自分の働きかけはこれでよかったのか」「別の働きかけをすればよかったのではないかと」、自分の働きかけに確信がもてず、悩むということに直面することになった。さらに、それだけでなく、自分の働きかけが問題点を持っていることにも気づくことになった。

そこで、小野保育者は、鈴木と共同研究を行った。小野保育者は、自分の保育実践記録に基づき、2人はどのような行動をするのか。なぜそういう行動をするのか、その時の内面の思いはどのようなものか、自分の理解を話した。また2人の内面の理解に基づき、保育者として2人にどのように働きかけたらよいと考えたのか、どのように働きかけたのか、そして、2人は働きかけをどのように受けとめたのか、今自分が確信がもてずに悩んでいることも含めて、話した。鈴木は、小野保育者の実践記録を読み、また話しを聞き、「2人はその内面でどのように感じ、思っているのか」「また保育者はどのようにかわることが大切か」——共同研究者としての立場からの——鈴木の理解と考えを述べた。小野保育者は、鈴木との話し合いを

通して、自らの理解と働きかけをさらに捉え直し、次の保育実践に生かし、つなげていった。

本共同研究は、このような研究方法において、実施されている。それゆえ、本共同研究を報告するにあたって、次のような構成をとりたい。

1. 保育者の立場からの、小野保育者による1学期の保育実践記録
2. 共同研究者としての立場からの、小野保育者の1学期の保育実践記録を読んだの、りくとはなはどのような子どもであるのか、また保育者はどのようにかわることが大切か、鈴木の理解と考える
3. 保育者の立場からの、小野保育者による2学期および3学期の保育実践記録
4. 共同研究者としての立場からの、小野保育者の2学期および3学期の保育実践記録を読んだの、りくとはなはどのような子どもであるのか、鈴木の理解と考える

本稿、「保育実践：りくとはなの思いに寄り添って（3）」では、このうち、「3. 小野保育者の2学期および3学期の保育実践記録」を報告する。なお、本稿での事例番号は、1学期の事例番号を引き継いだ通し番号である。

II. 小野保育者による2学期の保育実践記録

事例20 9月初め
りく君がせんのやったら、はなもせんわ！

9月2日

2学期に入り園全体が、運動会に向かっての活動を中心としているので、各クラスから遊戯の音楽が流れ園内はにぎやかである。5歳児は遊戯室で「よさこいソーラン」の踊りの練習をすることになった。はなは「この踊り、おもしろいな」と、友達と話しながら踊っている。㊦は、踊りの輪の中に入らず、遊戯室の隅にいた。私が「一緒に踊ろうよ」と声をかけると「ほっといて」と言いながら、だるそうに寝転んでいる。翌日も踊りの時間になると㊦は声をかけられることが嫌なのか、ステージカーテンの後ろに隠れたり、園庭に出て行こうとした

りして踊りの練習には参加しない。

9月8日

友達が踊っている遊戯室の真ん中辺りの床の上にりくは大の字になって寝転んだ⁽¹⁾。「りく君、危ないよ」「踏んでしまうからのいて」と友達から声をかけられるが動かない。周りの子はりくをよけながら踊っている。私は「りく君も踊ろうよ」と彼に手を差し出し起こそうとした。すると「ほっといて」と言いながらりくは立ち上がり、すたすたと出て行き廊下から友達の踊る様子を見る。しばらくすると、テラスのベンチに行き寝転ぶ。その様子を見ていたはなは踊りをやめてりくの横に行って寝転ぶ。2人はベンチに寝転んだまま空を眺めている。私は何と声をかけようかと考えながら2人の側にむかった。

私 「はなちゃんの姿が見えんようになってしまったらここであったん？」

2人 「・・・」(2人とも黙っている)

私 「青い空を見ていたら気持ちがいい？」

はな 「そんなに気持ちは、よう(よく)ないで」⁽²⁾

私 「はなちゃんは踊り疲れた？」

はな 「疲れてはないけど、りく君がせんのやったらはなもせんわ」

りく 「おれのことはほっとけ。はなはあっちにいて踊れ」⁽³⁾

はな 「・・・」(無言)

私 「りく君も踊ろうよ？」

りく 「いやじゃ！」

踊りの練習が終わり、みんなが保育室に戻ってきたので「みんなと一緒に茶饮もうよ」と2人に声をかけてみた。2人は素直に保育室に戻って行く⁽⁴⁾。友達から「りく君どこにおったん？」と聞かれ「えへへ。今日は踊りは休みや」と笑いながら返事をする。「ふん、明日は一緒にしような」と友達から声をかけられ「まあ、明日考えるわ」⁽⁵⁾と答えるりく。翌日も踊りの練習が始まると2人はテラスのベンチに寝転ぶ。

考察

○ この数日間、私はいろいろな言葉を探しり

くにかかわってきた。しかし、りくは頑として踊りの練習には参加しない。その上、はなまでも踊りをしなくなってしまった。他の子らがどんどん踊り方を体得していく中で、彼らの踊りをしない日が続く。2人と周りの子に取り組みの差ができ、ますます2人が踊りの輪に入りにくくなるのではないかと心配になる。これまでも、誕生会、老人ホーム訪問など、2人を励ましたり、やる気をもたせたりしてかかわってきた。その度に2人は不安な気持ちを乗り越え大勢の前で歌ったり踊ったりできた。自信をもったと思っていたのだが、1学期の経験は2人にとって何にもなっていないのか。私はどうかかわればよいか言葉が見つからないで悩む。

○ そこで、彼らの言動を丁寧に思い返し記録にとり、何度も何度も読み返した。そうすることで彼らの言葉や行動から、彼らの思いが感じ取れるようになっていった。

(1) りくの行動が、はなの行動(一緒に寝ころぶ)を起こす要因になったのでは。はなは友達と一緒に踊っていた時から、ずっとりくのことを気にしていたのだろう。はなはりくのことを気にしながら踊っていた時にりくがやって来て床に寝ころんだ。そして、また一人で出て行ってしまいうりくを見てはなは寄り添おうと思ったのだろう。その場で一緒にいることは、はななりのりくへの思いやりだったのではと推測する。

りくは、踊りに参加しない日が1週間続き、その間は友達の輪から離れている。踊りには参加できないが「おれはここでいるよ」と自分の存在をクラスの友達に示したかったのかもしれないと推測する。

(2) のはなの言葉には「本当は友達と一緒に踊りを続けたい、しかし今はりくに寄り添わなければならない。だから自分の本当の気持ちとしてはよくはない」という思いがあったのではないか。また、「りくは友達から離れて、どんな持ちなのか？寂しいのでは？」と、はなは考えてりくに寄り添おうとしたのだろう。私は「りくを踊りに参加させる

こと」に気持ちが向いていた。**はな**の行動から私は「**りく**の気持ちに寄り添うこと」の大切さをもう一度気づかせてもらった。

(3) の**りく**の言葉の中には、「本当は踊りをしないことがよくないことだとわかっている。でも、今の自分は参加できない。しかし、**はな**にはみんなと踊りの練習を続けてほしい」という思いがあったのではないか。この言葉の中には、**りく**の優しさが感じ取れる。

(5) **りく**の言葉からは、明日も自分は踊りには参加をしないつもりである。しかし、自分のことを気にかけてくれている友達に「明日もしない」とは言えないので「まあ明日考えるわ」と言葉を曖昧に表現したのではないかと推測する。**りく**は自分が友達に受け入れられていることがわかっている。本心は踊りの練習に参加したいのだろうと思う。でもできない。何が彼の心の底にあるのだろうか。

(4) の行動の意味するものは？

以前の2人は、友達と共にしなければならぬ活動を拒んだ後はなかなか集団の中に戻ろうとしなかった。2人とも一度すねたり、拒否したりすると自分の気持ちを立て直すことができにくかった。しかし、この日は素直に友達と一緒にお茶を飲み、友達と会話を楽しんでいた。この行動からは、2人がクラスの友達を信頼していることがわかる。周りの子らも2人が踊りの練習に参加しなかったことを責めることもなく見守っている。この様子からは、クラス集団の温かさが感じとれ、**りく**と**はな**がクラスの友達と関係が築けていることがわかる。私は記録を読み返し、退行したとばかり思っていた2人の姿とクラス集団に成長を見つけ出せたような気がし、焦りの中にもうれしさを感じた。

事例21 9月中頃

「はじめて、みんなで踊れたな」M男の言葉

今日も2人はベンチで寝転んでいる。他の子どもたちを同学年の先生方をお願いして、私は2人のところに行き、一緒にベンチに寝転んだ。2人は不思議そうに私の顔を覗き込む。2

人は私の行動に驚いた様子であった。

はな 「先生 踊りせんでええん？」
りく 「先生 なにしょん？」
私 「雲がないな。青い空だけやな」
はな・りく 「ほんとや。ずっと青いな」
私 「気持ちいいな」
はなとりくは「ふふふ」と笑い合う。
私 「**りく**君は踊りきらい？」
りく 「いいや」
私 「でも、踊らんやん」
りく 「・・・踊り方わからんし？
すぐに間違うもん」
私 「みんなだって、踊り方わからんと思うよ。もう一人の先生の真似してみんな踊っとんやで。私も間違いいっぱいするんで」
りく 「先生も？」
私 「『よさこいソーラン』は高知県の踊りでな。もう一人の先生は高知で生まれて子どもの時から『よさこいソーラン』を踊ったんやて。だから、とても上手やろ。私も初めの頃はわからなかったけどもう一人の先生の真似して踊っていたら楽しくなってきたんよ。今も間違いまくるけどな。でもな、間違えたってええんよ。それより、みんなと踊っていたらおもしろいよ。**はな**ちゃんも踊っていた時は、おもしろかったやろ？」(**はな**は、なにも答えないがにっこり笑う。)
りく 「間違えてもかまん？」
私 「間違えてもかまんよ。ぜんぜん平気や」
りく 「でも動くのがわからん」(踊りの隊形を変えること)⁽¹⁾
はな 「ああ、みんなで丸になったり、並んで踊ったりすること？」
りく 「そうや。踊りながらいろんなところに走るのがわからんのや」⁽²⁾

私 「じゃ、私がりく君の前で踊るから、私のおしりを見て追いかけてきて」

はな 「えー！おしり！」はなは大声を上げて笑う。その笑い声につられてりくも笑う。

私 「うん。私のおしり見て追いかけてきてよ。迷子にならないようにな」こう言って私は遊戯室に向かった。はなは私についてきて、踊りだす。りくは遊戯室までは行くのだが中に入らず、廊下から友達の前を踊る様子を見ている。時々、私と目が合うとにっこりと微笑む。はなはこの日から吹っ切れたようにみんなと一緒に踊りの輪に入り楽しそうに踊るようになった。その翌日りくは「先生、1回だけなら踊ってもええよ」⁽³⁾と言う。「踊ってくれる？それはうれしいな」と私はりくと手をつないで遊戯室に行った。約束どおり、私のそばでりくは踊った。「うれしい！今日はとてもうれしい日や。F組さんみんなできこいソーラン踊れた記念日だね。やった！」とりくを抱きしめた。「1回だけやで」と照れ笑いをするりくのうれしそうな顔が涙でにじんで見えた。周りの子らが「りく君、踊れるやん」「やったら、できるやん」と大きな声で言った。保育室に戻り、みんなでお茶を飲んでいる時にM男が「先生！今日はじめて、みんなで踊れたな。りく君、よかったな。やっぱり運動会の踊りは全員でせんとな！（全員でしないとねの方言）」⁽⁴⁾と、おどけるようにつぶやき笑う。M男の笑い声につられ、りくもはなも、私も、そしてクラスみんなで笑った。

考 察

- (1) (2) の言葉から、りくの奥深い不安な要因がわかる。りくは本当はみんなと踊りたい、でも隊形移動は自信がない。間違える不安がある。私は「みんなも踊り方がわからないけど何度か踊っているうちに覚えるこ

と」「間違ってもかまわないこと」などと繰り返しりくに話してきたが、りくの不安を取り除くことや心を動かすことはできなかった。りくは力を十分にもっているにもかかわらず「失敗を恐れ、間違えること」に非常に憶病になっているように感じる。りくは物事を考えすぎののかもしれないし、初めて経験することには行動を起こすまでにかかなりのエネルギーがいるかもしれない。

- りくはこれまで、大勢の中で踊る経験をしてきていないので50人以上の人数での隊形移動に見通しがもてなかったのだろう。りくの不安を少しでもなくせるように「私のおしりを見て追いかけて」と「おしり」という言葉をつかってみた。予想通り不安なりくの顔に笑顔が戻った。しかし、遊戯室に行くとも踊れない。頑張ろうとするが体が動かなくなるようだ。りくの不安の深さを感じる。これほどまでに不安な気持ちになるのはどうしてなのか？明日はなんと彼に言葉をかければいいのか？悩む。

(3) のりくの言葉はうれしかった。前日のりくの不安の深さを知り、私はどう言葉をかけたらよいかわからないまま「りく君、今日はどうする？踊れそう？」と、さりと声をかけてみたのだが、「先生、1回だけなら踊ってもええよ」とりくから思いがけない言葉が返ってきた。私は一晩中りくにかけ言葉やかかわり方を探していた。りくも昨日の行動に何かを感じ、自分から一歩進もうとしたのだろう。以前の私は「教師が意図したり、経験させたいと願ったりしていることを幼児がしなかったとする。それはその子どもが悪い。どうにかしてその子どもに気づかせ、教師の願いのように行動させたい」と考えていた。しかし「6歳児も葛藤し、そして自分で乗り越えようとする力があること」を私はりくのこの言動から学んだ。私はこんなに考えているのにどうして2人はわかってくれないのかと悩んでいた自分を恥じ、子どもをもっと信頼しようと思った。

- りくが踊り、周りの友達もりくが踊ったこ

とを喜んでくれたことは嬉しかった。また(4)の**M男**の言動も嬉しかった。以前、クラス全員の前で私は「なんで、**りく**君と**はな**ちゃんは踊らないの？運動会はみんなの運動会なんや。全員でしないと意味がない！全員が参加しないなら私はしたくない」と言ったことがある。2人が踊りに参加しない日が続き、私は冷静さを失っていた。取り返しのつかない言葉を子どもたちの前で言ってしまったと私はずっと後悔していた。その時のことを**M男**は覚えていたのだろうか？**M男**の言葉は私には意味深かったし、ありがたい言葉でもあった。ひょうきんに言葉を発して、クラスに笑いを起こしてくれた**M男**に感謝する。**M男**の言葉は**りく**の心にも残ったと思う。クラスみんなで笑い合え、連帯感を感じることができたように思う。

事例22 9月下旬

「また、**T**君と手つないであげるわな」**りく**

りくは「よさこいソーラン」を1回は踊るが、親子踊りの練習になるとみんなから離れて園庭の木に登る。私が声をかけると「『一回だけ踊る』と言うたやろ。ほんだきん、もうせんわ。ほっといて」と、嫌がる。他の子どもたちは2人組になり「親子踊り」の曲に合わせて踊っている。ふと見ると、**T男**が園庭の端に一人で座っている。私はそっと、**T男**に手を差し出した。**T男**が、手を取り立ち上がったので2人で手をつなぎ、音楽に合わせて園庭をゆっくり歩いていた。しばらくして**りく**が「先生なにしょん？」とやってきた。「**T男**君と踊っているんや。**りく**君、ちょっと手伝って」と、**T男**の左手を差し出すと、**りく**はその左手を握った。「3人で歩くと楽しいな」と言いながら、私と**T男**は**りく**の手をひっぱって踊りの輪に入ってしまった。**りく**は嫌がる様子もなく不思議そうに**T男**の足取りを眺めている。**りく**は**T男**の足と**T男**の顔を交互に眺めている。「**T男**君、上手に歩けるようになったな」と、私が言う。すると「歩けんかったん？」と不思議そうに**りく**が尋ねる。**T男**は、にこにこ笑っているだけでも答ええない。「**りく**君は知らんかったんやろ。

T男君な、年中組さんになってから少しずつ歩けるようになったんや。一生懸命頑張って、こんなに上手になってきよんよ」と、私が言い終わるか終わらないうちに**T男**が「**T男**、上手やろ」と、つぶやきながら笑顔で**りく**を覗き込む。**りく**は無言だった。「手をつないでくれたらどこでもいけるよな」と、私が言う。「どこでもいけるよな」と、**T男**がゆっくりと私の言葉を真似て繰り返し言い、にっこりと微笑む。「今日は**りく**君が手をつないでくれてよかったな。3人で踊りができたな」と、私が言う。「**りく**君が手をつないでくれてよかったな。3人で踊りができたな」と、また**T男**が穏やかな口調で繰り返し言いながら微笑む。黙って聞いていた**りく**が、「**りく**な・・・また・・・**T男**君と手をつないであげるわな」とつぶやく。「それはうれしいな」と私が言う。「それはうれしいな」と**T男**も言う。その間が、おかしく3人で笑いこける。

考察

- **T男**と**りく**はクラスが違うので、これまでかかわって遊ぶことはほとんどなかった。昨年、私が**T男**の担任だったことを知らない**りく**は、私と**T男**が手をつないでいることが不思議に思えたのだろうか。何をしているのかと気になり近寄ってきたのかもしれない。**T男**の足の運びがまだまだ不安定なので、**りく**は不思議そうに見ていたようだ。**T男**の穏やかな笑顔には、心が洗われる気がする。**T男**には友達を癒す力があるように思える。**りく**は手をつないであげたことで、**T男**の喜ぶ姿を目のあたりにして自分自身もうれしい気分になれたのではないだろうか。**りく**の表情からそう感じられた。**りく**は本当に優しい子だとあらためて思った。こんなに優しさをもっているのになぜ荒れた言葉や態度になるのか？そこがわからずにまた悩む。
- **T男**とのかかわりの後から、**りく**は踊りの練習に参加するようになった。そして、運動会にみんなと一緒に「よさこいソーラン」を立派に踊った。**T男**が一步一步、足を出して歩く姿に「できないことから逃げ出さず立ち

向かっていく強さ」をりくなりに感じたのではないかと思う。

事例20から事例22の考察

- 「りくが踊りに参加しない」ことに、まず、
① **はな**が寄り添った。②クラスの友達が2人を温かく見守り、りくの練習参加を共に喜んだ。③ **T男**の頑張る姿と優しい微笑みは、りくの張りつめた心を緩ませ、りく自身に頑張る力を起こさせた。

りくと**はな**を取り巻く環境が1学期とはまったく違う。それがりくを支え、成長させた要因ではないだろうか。

事例23 10月初め

ちょうさのとんぼはこうやって作るんで

数日前から、男の子達は段ボール箱でちょうさ作りを始めた。りくは少し離れた所からその様子を眺めているが友達から誘われても「せんわ」と遊びには入らない。男の子達はタオルでとんぼを作り、ちょうさの七条の上に作り付けた。「そのとんぼ違うで。とんぼはこうやって作るんで」とタオルを器用にとんぼの形に結び見せてくれるりく。「うあ。本物みたい。それを作って」と**M男**が言うが「いやじゃ」と自分で作ったとんぼを大事そうに持って園庭に遊びに行ってしまった。廊下では**はな**が友達と獅子遊びをしている。**はな**は実際に自治会での「獅子太鼓打ち練習」に毎日行っているので、できるようになった動きを友達に見せたり、太鼓の打ち方を友達に教えたりして、大勢の友達とお祭りごっこを楽しんでいた。「りく君もする？」と**はな**に声をかけられるが「せんわ」と走り去ったりく。

考察

- りくは、ちょうさがとても好きで関心を示しているが、一緒に遊びには入ろうとしない。友達から誘われても何故か嫌がる。他の子はりくからちょうさのことを教えてもらいたいし、一緒に遊びたいようで「先生からりく君も一緒にするように言って」と言いに来る。何度か私からも誘うが嫌がる。遊びたいのに素直に入れないように思えるが、無理に誘わずしばらく様子を見ようと思う。

- もし、自分だけがトンボを器用に作れて他の子はできなかったとする。そのことを友だちから認められると、大半の子は自分が優れていると感じて自分の知識を自慢する行動をとると思う。この時期の幼児はそうやって自分に自信をもって成長する。しかし、りくは自分だけができることでも自慢したり、得意になったりしない。それは彼の謙虚さなのか？りくは自分に自信がもてないのか？自尊心が育ってないのだろうか？

事例24 10月下旬

ジャングルジムがちょうさで

10月の初め頃から、りくは1人の男の子と一緒にジャングルジムで遊ぶ姿がよく見られていた。そこに男の子らが2人3人と集まっていく。今日は6人がジャングルジムの上に登って大声を出して楽しそうに遊んでいた。片づけになると「おもっしょかったな。また明日もしような」と楽しそうに友達と話しながら保育室に戻ってくる。翌日も同じような様子が見られた。私は少し離れたところから彼らの遊びを見守ることにした。「よし休憩。飲み物まわして」「かつぐぞ。電線に気をつけて」「かけ声いくぞ」と、りくがリードしながら6人がちょうさ遊びをしている。動かすことはできないがジャングルジムが、まさに「ちょうさ」になっているようだ。大人の真似してお祭りを再現し、楽しそうに遊んでいる。

考察

- ちょうさ作りにはりくは入ろうとはしなかったが、園庭の隅のジャングルジムがちょうさになっていて、そこで友達とお祭りごっこをしていた。園庭の隅は、周りの目を意識せずに自分を出せるのであろう。りくはちょうさのことをたくさん知っている。それを教えてもらうことが周りの子も楽しい様子である。りく自身も気の合う友達とイメージを共有して遊ぶことが楽しく満足している様子が伺えた。りくは恥ずかしがりやな面があるので（ごっこ遊びをしているところを見られると遊びをやめることが以前にもあった）、私はあえて少し離れた所から見守ることにし

た。

事例25 10月27日
「水族館に行っとったん。どんな魚おった？」

子どもたちは、昨日の遠足でたくさん魚を見たことが印象に残っていたのだろう。登園後、画用紙に絵を描き始める。イルカやサメなどを描きながら友達とおしゃべりを楽しんでいる。そこに**はな**が登園してきた。「みんな何しよん？」と、不思議そうに見ている。**はな**は遠足に行っていないので、寂しい思いをするのでは？どうやって慰めようかと私は言葉を考えていたが、「へえ、サメがおったんや」と、**はな**の明るい声。友達の絵を覗き込んで「うわーそんなに大きなカニもおったん。すごいな」と**はな**は目を輝かせて絵を見ている。そして、「私も描こう！」とスキップをしながらマジックを持ってきて友達の横に座り「**はな**な。昨日遠足に行かんかったけど水族館に行ったことあるから魚は知っとる。一緒に描いてもええ？」とにっこり笑う。「ええよ。描いて」と横に子いるが嬉しそうに**はな**を見て答える。「わかった。何かこうかな」と、鼻歌を歌いながら絵を描き始める。

考察

○ 台風のため親子遠足が延期になり、昨日の親子遠足は仕事の都合で参加できない人達があった。遠足に行けなかった子らが寂しい思いをしないかと心配していたが、**はな**は何事もなかったように遊びに参加していた。友達と楽しそうにおしゃべりをしている様子を見て私はほっとした。

事例26 10月28日 **どんなバスやったん？**

登園後、今日も遠足の絵を描いている。一人の女の子が桃色のバスを描いている横では別の女の子が水色のバスを描いている。そこに**はな**が登園して来て、しばらく2人の様子を見ている。「バスって桃色やったん？水色？どっち？」と尋ねる。「えーと。白に文字がはいっとったけどな」とその女の子が答えると「でも桃色やん」と**はな**が絵を指差している。「そうやけどな。私は桃色が好きなんや」とその子が答える。「そうやな！かわいいもんな」と**はな**はにっこり笑

う。そして一緒に描き始め友達と楽しそうに遊んでいる。「あっ、今日はお祭りごっこや。片づけしようよ」と、突然**はな**が大きな声で言う。楽しみにしている「お祭りごっこ」に参加しようと、子どもたちは張りきって片づけを始めた。

事例27 10月28日
祭りごっこに入りたいのに入れない

10時から園全体行事「お祭りごっこ」なので全園児が遊戯室に集まりだす。獅子を使ったり、ちょうさを担いだり、遊戯室はお祭りごっこでにぎやかだ。**りく**は遊戯室に入らずに廊下からみんなの様子をのぞいている。「一緒にしようよ」と友達から声をかけられるが入らない。しばらく廊下とテラスを行ったり来たりしている。私はあえて彼を誘わなかった。かなり時間が経過してから「ちょうさが重いから手伝ってよ」⁽¹⁾と声をかけてみた。「えーしょうがないな」と、ちょうさを担ぎ出す**りく**。いざ遊びだすと笑顔でちょうさを担ぎ、その後はずっと友達とお祭りごっこを楽しんでいた。

考察

○ 遊びに入りたいのに素直になれない様子。まして、今日は園全体のお祭りごっこなので大勢の中に（100人以上）入るには勇気が入るのかもしれない。後押しされると遊びに入ることもあるが、彼は後押しするタイミングが難しい。早い時期に誘っても**りく**は動かない。友達が声をかけた後に私はわざと声をかけなかった。**りく**の優しさを引き出そうと、（1）の言葉を考えてかけてみた。今日は私の声かけのタイミングと**りく**の遊びたい気持ちの高まりがうまくあったのだろう。

事例28 11月初め **F組水族館に全員集合や！**

10月末から子どもたちは魚の絵を描いて遊んでいた。ある男の子が一枚の水色の色画用紙に自分が描いた魚を切り取って貼り「見て水族館やで」と、友達に見せていたことがきっかけとなり水族館づくりが始まった。水色の画用紙をつないで大きな水槽の絵が出来上がっていく。その傍らでは「バスを描こう」「道路を描こう」と友達と一緒に遠足の絵を描いて遊んで

いる子もいた。「遠足の絵」から道路、車やお店、家を描く「町づくり」に発展している。今日も**はな**は友達と一緒に楽しそうに絵を描いていた。「この水族館、飾ったらええな」「窓に貼る?」「いいこと考えたよ。F組水族館にしよう。先生、ここに飾って」と数人が私を呼びに来る。私は絵を飾るか迷った末に、保育室の壁面に貼った。翌日「今日はみんな自分を描こう」と、子どもたちに自分の等身大の絵を描いてももらい、水槽の周りに全員の子どもの絵を貼った。「うわあ。みんながお魚を見よとこや」「本当の水族館みたいになったな」と子どもたちは喜ぶ。ある子が「**りく**君も**はな**ちゃんもおるよ。遠足は行ってなかったけど『F組水族館』には一緒に行けたな!」と笑顔で言う。「ほんとうや。全員集合になったな」と嬉しそうに答える**りく**。「先生、F組水族館に全員集合やな!」とある子がガッツポーズをとる。「1.2.3.・27やほんま全員集合ですな!」と数えて**M男**がおどけて言ったのでクラスみんなで大笑いをした。⁽¹⁾

考察

○ みんなが作った水族館の絵を飾りたいと私も思ったが遠足に行っていない**はな**と**りく**は悲しい思いをするのではと私は絵を飾ることを躊躇していた。しかし、子どもたちの思いも大事にしたいので飾ることにしたが、遠足に参加した子ども達だけの作品にならないようにするにはどうすればよいかを考えた。全員の子どもの絵を貼ったことで思いがけない声子どもたちから聞いた。「F組27人みんな仲間なんだ」という思いが子どもたちの中に育っていると感じられ嬉しかった。(1)の**M男**のおもしろい表現にはクラスが明るくなる。**りく**は**M男**の言葉によく声をあげて大笑いする。**りく**と**M男**は親しみをもっていることがわかる。

事例29 11月半頃

お店屋さんの屋号で友達と折り合いをつける

「お店屋さんごっこ」に向けて、店名を相談していた。**はな**が「ドーナツ屋さんにしたらええ」と切り出すと、一人の女の子が「アイスク

リーム屋さんがええ」と言う。**はな**は「そんなこというたってお店は一つなんやからドーナツで決まり!」と言う。その女の子も譲らず「いや。アイスクリーム屋さん」と言い返すので**はな**は「いかんやろ」と大声を出す。すると同じグループの男の子たちが「えー。おすし屋さんで!」「そうや。このグループはおすし屋さんでな」と顔を見合わせて言う。**はな**「いつ決めたんよ?そんなのいかん。あんたたちだけで決めるのはダメ。みんなで相談せないかん」と興奮気味。口々に自分の思いを言っていると、同じグループのもう一人の男の子が初めて口を開き「決まらんやろ。みんな、うるさいな」と大声で叫んだ。**はな**は「うるさいって何よ。みんなで決めないかん」と怒る。「だって、いつまでたってもお店にならんわな。先生」と男の子達は私に助け舟を求める。「うーん。お店にはいろんな物を売ってるから、品物の種類は多くてもいいかな?」と、私は優柔不断に答えた。「それじゃ名前が決められない」と子らが言う。**はな**は「おすし屋に、ドーナツがあったらへんなよな」と冷静に言う。すると「じゃ、なんでも屋さんにしたら」と男の子。**はな**は「へんな名前やわ。ださい名前やな」と笑う。「じゃ、なんでも食べ物屋にしたら」と友だちに言われ「なんでも食べ物屋か?まあ、それでええか」と**はな**。「なんでも食べ物屋にしよう」「決まりやな」と周りが言い、「まあ、ええ名前やわ。ほんだら食べ物なんでも作って売れるで」と**はな**は納得する。

考察

○ グループの友達と相談を始めたが、それぞれが自分の思いを言うだけで、なかなか一つにならなかった。しかし、一つにしなればという思いを全員がもっているようで、かなり時間はかかったが、話し合いの中で折り合いをつけることができた。

○ 最近、**はな**は友達と口げんかが増えてきた。周りの子も**はな**に遠慮せずに自分の思いを出すようになり、お互いに思いを出し合って遊べる関係になっている。マイナスではなくプラスの発達だと捉える。自分の気持ちを

素直に出せる友達関係が育ってきて、その中で意見を出し合い折り合いをつける経験は人間関係の中で大切なことだと思う。

事例30 11月半頃

「よせて」と自分から言えた

M男が男友達と一緒に割り箸鉄砲を作り遊んでいる。標的にロボットを作り倒すことでなお盛り上がる。「やった。倒れた」と歓喜をあげ楽しそうに遊ぶ様子を「寄せて」と次々に友達が集まっていく。数日、この遊びが男の子たちの間で盛り上がっている。**りく**も関心があるようで友達の様子を見ている。しかし「一緒にしようよ」と友達から声をかけられると「いやだね」と外に遊びに行く。翌日もその遊びを少し離れた所から見ている**りく**。入りたいのに入れずにうろうろしているように見える。「よせてと言ってみたら」と私が声をかけると「いや。ボールで遊ぶ」とドッジボールを持って外に行ってしまった。しかし、ほとんどの子が射的遊びをしているので、ドッジボールの人数が集まらない。**りく**は一人でボールを蹴っているがすぐに飽きて保育室に戻ってくる。保育室では男の子達が射的で「当たった!」と歓声をあげたり「おしかったな」と失敗した友達の肩をたたいたりワイワイと遊んでいる。そんな様子をじっと見ながら友達が失敗すると「おいしい」とつぶやく**りく**。「**りく**君は当てることできる?」と、私は声をかけた。「簡単に当ててやるわ」と**りく**が答えた。「じゃ、してみたら」と言う。「うん、よせて!」と、**りく**が笑顔でみんなに大きな声をかけた。「いいよ」と周りの子が返事をし、一緒に遊びだした。

考察

○ **りく**は、遊びに入りたいのに自分から「よせて」ということには抵抗があるようだ。

「恥ずかしがりや」の性格のせいかな。年長児でこのクラスに入ってきたことが影響しているのか?新しい場面になるとこのような姿が見える。だれかの後押しがあれば入れるのだが。しかし、今日は「よせて」と自分から言えた。「みんなと遊びたい」「鉄砲を作りたい」という思いがあり、彼なりに葛藤してい

たのだろう。すーっと出してしまうばなんでもない言葉「よせて」。しかし、**りく**にはハードルがある言葉なのだろう。

この射的遊びは、**りく**たち男の子のグループのお店ごっこにつながっていった。そして、お店ごっこでは、友達と「射的屋さん」をして年少・年中児をお客さんに迎え、一緒に遊んだり、射的のコツを教えたりして楽しそうに遊んでいた。友達と遊びを満喫する**りく**の様子が見られた。数日間、射的遊びで盛り上がり友達と楽しそうに遊ぶ**りく**の様子を見ていると、これからは素直に自分の思いが言えるような気がするが。

事例31 12月初め

「合奏は嫌や!やめたいわ」から「音がそろってきたな」

合奏をすることになり自分のしたい楽器を選ぶ。**りく**はカスタネットを、**はな**は鉄琴を希望することになった。**はな**は運よく勝ち鉄琴をつかえることになれて大喜びする。翌日から楽器ごとにパート練習を始める。「さんぼ」の合奏譜面を見ながらリズム打ちをはじめめる。男の子たちは、初めは喜んでカスタネットを叩いていたが、すぐに飽きた様子で「面白くない」「もう、やめたい」と口々に言う。日を追うごとにやる気がなくなっているように感じる。カスタネットは全員男たちばかりなので、練習の途中で追いかけてこをしてにぎやかに遊びだす。どうやれば合奏に興味をしめしてくれるのか?「させられている」と子どもらが感じない方法はないかと思案する。私は「さんぼの曲に合わせて自分たちで好きなようにリズム打ちをしてみたら」と提案した。「えー!先生がせんかったら、分からへんやん」と**りく**が言う。「できるって。曲を聴きながら自分の好きなようにカスタネットを打ってみて」と言うと、一人の男の子が「おー!やろうぜ」と叩き出す。自由に打つのでにぎやかで合奏とはほど遠い。でも子どもたちは自由に打つことが楽しいようだ。「自分の音だけでなく、お友達の音を聞いてみてよ」と助言しながら、私も一緒にリズム打ちを楽しむ。日増しにバラバラの音がそろってき

たような感じがする。何日かたつと、さんぽの曲に合わせて、打つところと休むところがだんだんと合って、みんなが音を合わそうとしている様子が見えはじめた。「先生、なんか音がそろってきたな」と**りく**がカスタネットを打ちながら笑う。「ほんとうやな」「ええ感じやな」と、みんなが笑いながら輪になってカスタネットの音色を楽しむようになった。**はな**は鉄琴のパートのリズム打ちができずイライラしているようだ。6人で練習しているが**はな**は机の下に座って動かない。「**はな**ちゃん、どうしたの？」と友達から声をかけられると「ほっといて」と言う。それでも心配して何度も声をかける友達に「ほっといてといよるやろ」と強い口調で言うとは黙り返す。「一緒にしようよ」と私が声をかけると「もう、できん。鈴かカスタネットにしたらよかった」と**はな**。他の楽器に変えるのも一案かと思っただ、できないから逃げることになるのでは、**はな**にとってよくないのではないかと考える。「今日から先生と2人でがんばってみよう」と励まし、毎日2人だけで練習をする時間をもった。数日後、**はな**は自分だけで少しずつ叩けるようになってきていた。私が「上手になったな。あきらめんでよかったな」と声をかけると「うん」とうれしそうに笑う**はな**。自分から「一緒にしよう」と友達を誘って一緒に練習するようになった。

考 察

- 楽器遊びには個人差がある。すぐにできる子もいるし、最初はいまよくできないが練習を積んで上手になっていく子もいる。同じ活動をしている中で誰かが上達していくと、周りの子の様子に2つのタイプが見られる。「自分もできるように頑張ろう」という気持ちになる場合と「自分ではできないからやめたい」という気持ちになる場合があると思う。**はな**の場合は後者であろう。やりたかった鉄琴であるが始めてみると難しく、うまくできないので辛く、上達していく友達の様子を見て、やる気を失っているようだ。
- 合奏は、個人プレーではなく友達と合わせなければならない。ピアノを習っている人と

習っていない人には楽譜への関心も違うし、取り組みも個人差がある。**はな**も**りく**もなかなか思うようにならないことに葛藤があったようだ。「できないからやめる」のでなく「今はできないことも、やがてできるようになる」という経験を2人にさせたいと思った。「やがてできるようになる」ためには、その子なりの頑張りが必要となるので、途中であきらめないよう支えていこうと思う。

Ⅲ. 小野保育者による3学期の保育実践記録

事例32 1月 あきらめんでよかった!

1月始め、友達に誘われて**りく**も**はな**もマフラーを作り始めた。2人とも初めの頃は喜んで作っていたが、すぐに飽きてやめてしまった。友達のマフラーが出来上がると「ええな」と羨ましそうにする。「マフラーを仕上げたい」という思いと「めんどくさい」という気持ちが交差しているようであり取り組まずにいた。私は2人に「こつこつと毎日少しずつしたら、いつかはマフラーが出来上がるよ」と声をかけ続けた。1月の末、やっとマフラーが出来上がった。2人は「できた!」「やっとできた。長いことかかったけど、できてよかった」「お母さんに見せよう」と大喜びをした。**はな**は一日に何度も保育室に飾ってある自分のマフラーを手にとって「先生の言うとおりでよかった。あきらめんできたらできるんや!ちゃんとできた。あきらめんでよかった!」と一人で何度もつぶやいていた。合奏とマフラー作りの経験は2人にとって「やればできる」という自信になったと思う。

事例32 2月初め 給食当番をいきいきとする2人

今月のグループ替えで、**はな**と**りく**は同じ給食の当番班になった。「ワンピースチーム」と当番表を見ると急いで台ふきを取りに行く2人。**りく**は給食をクラスで1番に食べ終わる。食後しばらくは椅子に座って静かに過ごせる。「あっ。もう4きた(12時20分)片づけしてもいい?」「ご馳走さまでした」と**りく**は食器を片づける。その後、はみがきを済ませる

と「もっていくわな」と食缶を給食室に戻しにいく。そして友達の席を回って「牛乳瓶もらいます」と次々と片づける。他の当番の子は食べ終わってないので**りく**が一人で片づけている。「少し休んだら。他の当番さんが給食終わってから一緒に片づけたらええよ」と私が声をかけると「ええの、ええの。一人でも大丈夫」と笑いながら**りく**は次々に片づけだす。**はな**も給食が終わり「手伝うわな」と食缶を運んだり、机を片づけたりする。食べ終えた当番さんが次々にやってきて7人全員で床掃除。ごみを集めている友達にちりとりを持っていき「うまく入るかな」「おっと入りました」と楽しそうにごみ集めをする。その後、雑巾で床拭き。「みんな、並んで」「いくよ」と7人が並んで楽しそうに床を拭く。「次は廊下や」「OK、これで終わり」「外で遊ぼう」「ドッジボールする?」「一輪車しようか」と、**はな**も**りく**も友達と一緒に嬉しそうに園庭に飛び出して行った。

考察

○ 一学期は2人とも自分の食器を片づけることにも「めんどくさい」と、しぶしぶ片づけていた。当番が嫌で「そんなん。せんわ」と園庭に遊びに行ってしまう。「当番やろ。戻ってきてしなよ」と同じ班の友達に呼び戻され「めんどくさ」「なんでこんなことをせないかんの」と怒っていた。そんな彼らが、今では自分一人でも張り切って当番をしている。友達と楽しそうに雑巾で床を拭いている姿を見ると、なんとも成長したものだと思う。いつ頃からだろうか、2人から「めんどくさい」「ほっといて」「いやだね」の言葉が出なくなったのは? 友達に支えられたり励まされたりしながら、自分のしなければならぬことをきちんとやり遂げる責任感が育ってきたと感じる。

事例33 2月中頃 友だちカルタづくり

クラスで「大型友だちカルタ」を作ることになった。クラスみんなの一人一人の良いところや好きなところを話し合い、自分たちで「友だちカルタ」を作った。「**りく**」君の良いところは「困ったときに助けてくれてやさしい」「好

き嫌いがなく、なんでもいっぱい食べることができる」「サッカーが上手で一緒にしてくれる」、**「はな」**ちゃんの良いところは「一緒に遊んでいると楽しい気持ちにさせてくれる」「おもしろくて一緒にいると楽しい」「笑顔がとてもすてき」と周りの子が次々に手を挙げて2人の良いところを言っていた。

考察

2人は入園当初、集団の中になかなか入ろうとせず自分本位の行動をとることが多く、友だちや教師から注意されることが多々あった。それゆえに私はクラスの中に2人のマイナスイメージが定着しないだろうかと危惧してきた。2人の良いところをみんなに気づかせたり、褒めたり認めたりする機会をとるように心がけてきたつもりではあるが、**はな**の場合は女友達が早くからでき、友達とのかかわりもスムーズにできてきたが、**りく**は、なかなか友達の輪に入れなかった。そんな時に**りく**は荒れた言動をとっていたので、1学期前半頃は、クラスの中には**りく**を怖がる子もいた。周りの子どもたちはしだいに2人を受け入れて遊ぶようになっていった。しかし、クラスの子らの本心はどうか? もし、2人の良いところを周りの子が言わなかったら2人を傷つけることになる。私は内心ドキドキしながら2人の良いところを周りの子に尋ねてみた。私の心配はすぐにかき消され、話し合いでは2人の良いところを周りの子が次々に言ってくれた。その上、男の子の中には「ほくは**りく**君みたいになりたい」と言う子もいた。私は、**りく**は繊細な子で、自分に自信が持てなかったり、自分の不安な気持ちを隠そう、払いのけようとして暴れたり乱暴な言葉を出してしまっていたのではないかと思う。本当は優しさをいっぱいもっているし、友だちをかばったり助けたりする男気もある子だと感じていた。クラスの子も私と同じように感じていたのだろう。2人がクラスの中で、とても良い存在になっていることを感じてうれしかった。

事例33 3月 修了式を迎えて

修了児の名前を読み上げると「はい」と大きな声で緊張気味に返事をする**りく**。証書をもら

い深々とお辞儀をして堂々と壇上から降りてくる。練習の時は舞台上の上に歩いていくことが恥ずかしく、いつも下を向いていたのに今日は凛とした姿だ。**はな**は、手を組んで自分のひざの上でぼんと手を動かし、もぞもぞと体を動かしかしている友だちに「静かに座ってなよ」という合図を送っている。合図に気づいた子は「わかったよ」というように**はな**を見て無言で頷くと背筋を伸ばす。すると**はな**は私の方に視線を送りにっこりと微笑む。私は「ありがとう。教えてくれて」という思いを込めて微笑み返した。来賓の話が続くと、**りく**は飽きたのか、もぞもぞと動き出す。じっとしているのが辛くなると、振り返り私の顔を見る。私が「もう少し。頑張れ」とゆっくりと口を動かすと「うん」と、にっこり笑い、前をみて姿勢を直す**りく**。2人と目と目で気持ちが通じるようになったことが私には何よりの喜びだ。大きな声で「お別れの言葉」を言う2人の顔を見ていると、1年間のいろいろな場面が走馬灯のように思い出され、我慢していた涙をこらえることができなくなってしまった。**はな**は私が泣いているのに気づき涙を流している。**りく**も私が泣いているので神妙な顔つきでこちらに視線を送る。**はな**が涙で歌えなくなったらいけないので、私は必死で涙をこらえて微笑み返した。まさかこんな感動の修了式が迎えられるとは。2人の成長した姿がまぶしかった。

1年を振り返って

私はこれまで「幼稚園生活の中で、幼児が人とかかわりを深め規範意識の芽生えを育成していく」すなわち集団生活の中で「してよいこと」と「してはいけないこと」に気づかせることが保育者の役割であると考えてきた。それゆえ、集団に入ることに抵抗を示し、荒れた言動をとる**りく**と**はな**に、どうかして善悪の判断を身に付けさせ「みんなと仲良く遊べる子に」指導しようとした。でも私の指導は空回りする。私の言葉が2人の心に届かない、2人の思いが私にはわからない。私は、どうすれば2人と心を通わせることができるかを1学期は悩み続けた。まずは2人をそのまま受け入れよう。

そして2人に温かさを伝えようと考えた。毎日必ず何度も2人を抱きしめること、何があっても2人を信じようとした。「荒れた言動には何か理由があるはずだ」と2人に寄り添っていくよう努力した。そんな中で2人の不安や葛藤、ストレスに気づくようになっていった。不安のことは少しでも取り除けるようにかかわったり、葛藤している時、ストレスを感じている時には彼らが自分で自分をコントロールできるよう助言していったり「私はいつもあなたの味方である」という態度をとるよう心がけた。そうしていくうちに2人が私を信頼してくれるようになり私の前では子どもらしい表情で笑ったり、はしゃいだり、優しい言動も出すようになる。これが2人の真の姿だと思った。友達の中でも自然な姿を出せるように2人と他の子ども達とのつながりができるような環境づくりをしていった。

2学期の終わり頃に、ある子がぼつりとつぶやくように「先生、**りく**君っていい子なんやな？」と言った。「そうだよ、いい子だよ。でどうして？」と、私が尋ねると「僕な、ずっと**りく**君は怖い子かと思っとったんや。だって怖い言葉を言ったり暴れたりするやろ。でも、本当は優しいし、おもしろいな」と話してくれたことがあった。この子だけでなくほとんどのクラスの子は、2人に同じような思いをもっていたのだろう。運動会の練習の頃から仲間意識がクラスの中に育ち始めた。クラス集団が2人を温かく見守り、2人の変化を共に喜ぶようになっていった。2人もクラスの仲間に支えられていることにこの頃から気づき始めたように思う。

○ 卒園後、あるお母さんから「うちの息子は『春休みになって、**りく**君と遊べんようになったことが悲しい。いつがきたら**りく**君と遊べるん？小学校に行ったら**りく**君と同じクラスになれるかな』と毎日毎日言うんです。うちの子はずっと**りく**君に憧れていて**りく**君みたいになりたいんですって。幼稚園から帰ったら毎日毎日**りく**君と遊んだことを楽しそうに話す我が子を見ていてうちの子は本当

に**りく**君を好きなんだなと思いました」と。またあるお母さんから「1年生みんな元気ががんばってますよ。入学式はどの子もきちんと返事ができてずっと静かでしたよ。それは見事なすばらしい入学式でした。先生に見せてあげたかったです。幼稚園の入園式とまったく違って成長を感じました」またあるお母さんから「うちの子は3歳児組から一緒だった子と同じクラスだったので『良かったな』と私が言ったら『やった！お母さん、**りく**君と同じクラスになれたよ』と大喜びで何度も言うんです。その子と同じクラスになれたことよりも**りく**君と同じ組になれたことのほうが嬉しかったんですって。**りく**君が大好きみたいで。あんな嬉しそうな姿にはびっくりでした」と話された。**りく**と**はな**がクラスの中で、嫌われないように悪い子と思われないようにマイナスイメージだけは何とか払拭したいと私は思ってきた。それが、こんなに周りの子から慕われていることがお母さん達の話から分かり嬉しかった。2人の内面にある優しさを周りの子どもたちも感じ取ってくれたのだと思う。「子どもの言動には必ず理由がある」このことを私は**りく**と**はな**から教えてもらった。これからも言動の表面だけを捉えず、子どもの内面を理解するように、一人一人に寄り添っていきたいと思う。